

神奈川県にいた！珍虫クサレダマバチ！

わたなべ きょうへい
渡辺 恭平(学芸員)

どん底にある神奈川県の自然

神奈川県ではこのところ、レッドリストの改訂を進めており、現在は昆虫分野が調査を進めているところです。今回の調査では、改めて神奈川県の自然環境の劣化をまざまざと知ることとなり、調査に出かけるたびに暗澹たる気持ちとなりました。特に、開発や農薬などで住処を追われた生物が逃げた山林の自然が、ニホンジカ(以下、シカ)による食害で徹底的に破壊されている点は深刻で、今までは保護区を設定し、開発さえしなければ守られていた昆虫が、次々に減んでいます。良く「豊かな自然」というワードが使われますが、自然史科学の視点から見て、神奈川県ではそのような場所はほぼ消失しており、単に「視界に緑地が豊富」な場所を自然が豊かな場所として錯覚している(あるいは商売上の宣伝文句にしている)ことを、我々は認識すべきでしょう。

久々の明るいニュース

そのような中で、昨年の夏に久々に明るいニュースがありました。箱根町の仙石原湿原とそこに隣接する箱根湿生花園で、ハナバチの一種、シロアシクサレダマバチ *Macropis (Macropis) tibialis* Yasumatsu & Hirashima, 1956 (図1. A, B)が発見されたことです。このハチはクサレダマバチ属 *Macropis* に属し、ハナバチ研究の大家であり本種を記載した平嶋義宏博士が、随筆(平嶋, 2007)の中で、「これは珍品だ」という予感がした」と書かれたように、黒光りする格調高い見た目や、後述する特殊な生態も相成って、まさに「珍虫」の名にふさわしい昆虫であると言えます。今回の発見はクサレダマバチの仲間自体が県初記録となります。ここでは、神奈川県で見つかったシロアシクサレダマバチについて、紹介したいと思います。

シロアシクサレダマバチの生態と分布

ハナバチの仲間は成虫が花に飛来し、花の蜜と花粉を集めます。身近な花を見ていると、ハナバチの仲間である

ミツバチが良く飛んでいますので、観察してみてください。花に口を突っ込んで蜜を吸う様子や、後脚に黄色い花粉の球をつけている様子が観察できます。花の蜜は主に成虫の活動源、花粉は主に幼虫の餌に使われます。多くのハナバチは多少の好みはあっても、様々な花を利用しますが、クサレダマバチの仲間は特に偏食家で、和名の通りクサレダマ *Lysimachia vulgaris* という花に特化して飛来します(図2)。この花には花粉があるものの、蜜を出さずに、代わりに油を分泌しますが、このハチはその油を巣づくりに上手に使うそうです。クサレダマの種小名 *vulgaris* は「普通の」とか「ありふれた」、という意味

ですが、開発などの影響を受けやすい湿った草地に生える植物のため、特に関東地方以西では少ない植物で、県内での自生地も少なく、仙石原湿原など限られた場所にしか豊富に自生していません。シロアシクサレダマバチは北海道と本州に分布し、北海道では割合に見られますが、本州ではクサレダマが比較的まれな上、営巣するための環境も必要となることから、分布はかなり局所的で、青森県や栃木県のような環境が良い地域でもレッドリストに掲載されています。関東地方では栃木県の数か所しか確実な産地はなく、山梨県の既知産地は私が調べたところシカの食害によりクサレダマそのものが消失して姿が見られず、静岡県では花があってもハチの姿が見られず、一番近い産地は栃木県になります。環境悪化の著しい神奈川県でありながら、仙石原湿原に本種がいたことは、まさに奇跡といえます。



図1. シロアシクサレダマバチ (A: メス; B: オス)。

鋭い読者の方は、クサレダマバチの成虫は自身の栄養源である花の蜜をどうしているのだろうか疑問に思うでしょう。先行研究では、本種がクサレダマに近縁のオカトラノオやヌマトラノオの花に来ることが記述されていました。仙石原で観察していると、やはり同じ場所にこの仲間の花(イヌマトラノオ)が咲いていること(図3)や、昼頃から花に飛来して、盛んに蜜を吸う様子が観察できました。面白いことに、湿原に生える他の花には、他のハチは飛来するものの本種はまったく飛来せず、やはりかなりの偏食家のようです。おそらく、クサレダマの存在、巣を造れる場所の存在に加え、蜜を提供する植物の存在も、本種が生息するためには必要な条件であるのでしょう。ちなみに、営巣場所は仙石原では見つからず、先行研究でもごく断片的な記述しかありません。今後営巣地の諸条件を理解することが、本種を保全する上で重要になると言えます。

神奈川県シロアシクサレダマバチの現状と未来

近年の温暖化は、クサレダマの開花期を早めているようで、昨年の開花期は箱根湿生花園の案内板の解説よりも半月ほど早い、7月上旬でした。幸いなことに、このハチの出現も花の開花期に同調してか、7月上旬となっていました。このような偏食家のハチにとって開花時期の極端な変化は命取りとなることから、油断はできません。

県内の本種の生息地は狭い範囲ですが、幸いなことにシカが侵入しないように柵が設置された内側で、植物の生育が維持されている場所です。しかしながら、柵内に侵入したシカがいる(!)ことや、柵の破損などでシカが侵入する恐れもあることから、箱根地域におけるシカの駆除を進める必要があります。このハチは昨年に神奈川から見つかったものの、すでに絶滅の瀬戸際にあり、シカを防ぐ柵で囲まれた狭い範囲で、かろうじて命脈を保っていると言えます。この愛くるしいハチを、将来に渡り大切にしていきたいものです。

虫好きの目と花好きの目

シロアシクサレダマバチの話をも虫好きに話すと、クサレダマという植物を知らない人がほとんどです。仙石原湿原で昆虫を調べる人は過去にもそれなりにいたはずですが、その調査網にもひっかからなかったのは、クサレダマという植物が虫好きにとって盲点であったためと言えます。また、花好きでハチまで見る人もごく少ないようです。今回シロアシクサレダマバチが発見された箱根湿生花園には年間に多くの来園者が訪れ、多くの方がカメラで花の写真を撮影します。クサレダマは割合に背丈もあり、美しい黄色い花を咲かせることから、案内看板にも掲載されており、今までにおそらく数万枚のクサレダマの写真が撮影されているにもかかわらず、誰一人としてこのハチの存在に気付かなかった(!)ことがその事実を裏付けています。

ハナバチの仲間には同定が難しいものが多く、写真だけでは種名がわからないものも多いのですが、幸いクサレ



図2. クサレダマに訪花するシロアシクサレダマバチのメス。



図3. シロアシクサレダマバチの生息環境。黄色い花がクサレダマ(花粉と油を集める花)、白い花がイヌヌマトラノオ(蜜を集める花)。写真中央のクサレダマに見える小さな黒い点はメスのハチ。

ダマバチの仲間は写真でもある程度同定ができるので(複数方向からの写真を撮影し、特に後脚の側面を写すのがポイントです)、花好きの方にはぜひ花見の際に虫見もしていただければと思っています。

この発見についての報告は、神奈川自然誌資料 第46号に掲載されており(渡辺, 2025)、博物館のウェブサイトからご覧いただけます。興味のある方はぜひご覧ください。

謝辞

調査に際しお世話になった箱根湿生花園の皆様にご感謝申し上げます。

引用文献

- 平嶋義宏, 2007. 新しい花蜂の発見物語. 月刊むし, (436): 30-33.
- 渡辺恭平, 2025. 神奈川県から発見されたシロアシクサレダマバチ *Macropis tibialis* Yasumatsu & Hirashima, 1956 (膜翅目ケアシハナバチ科). 神奈川自然誌資料, (46): 1-8.